



Title	Lord Jim に見る夢の構造
Author(s)	中村, 嘉男
Citation	長崎大学教養部紀要. 人文科学篇. 1986, 27(1), p.27-39
Issue Date	1986-07
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10069/15223">http://hdl.handle.net/10069/15223</a>
Right	

This document is downloaded at: 2019-04-20T02:34:45Z

## *Lord Jim*に見る夢の構造

中 村 嘉 男

### The Structure of the Dream of Honour in *Lord Jim*

Yoshio NAKAMURA

#### I

*Lord Jim* の論じにくさは、主に、主人公 Jim を評価することの困難さに起因していると言えるだろう。Jim については、今日まで様々な研究家が様々な捉え方をしてきた。彼の犯した大きな過ちにもかかわらず最終的に彼を「名誉」のために死んだ“amazing”な青年と見る研究者もいれば<sup>1</sup>、逆に彼の子供じみた自己栄光化を手厳しく批判する評者もいるし<sup>2</sup>、また J. Hillis Miller のように、Jim を固定的に評価することの不可能性を論じる人もいる<sup>3</sup>、といった具合なのだ。意見はそれぞれ違っても、彼らが Jim の特徴を彼らなりに掴んでいることは疑えないようにみえる。ただ私には、彼らがいずれも大きな問題を見過ごすことによって、Jim 評価の困難さを生み出しているものを捉えそこねているような気がしてならない。その問題というのは、この小論の表題として掲げている夢または願望のことである。夢や願望の多くは、個人の内から生まれながら同時に社会の諸制度を母体とし、それらを支えている。このような夢のからくりを凝視することこそ、Jim の苦境の根源を凝視し、そうすることによってそれを脱根拠化することであると思われる。Hillis Miller は *Lord Jim* に根源がないと軽すぎる口調で繰り返し語っているが、Conrad は明らかにその作品にある根源を描き込もうとしている。根源を丹念に描いて凝視することなしに、真の脱根拠化の達成は不可能なのだ。

なぜ Conrad は、根源を根源でないものにするために、わざわざそれを描こうとしたのであろうか。それは、根源が根源としての根拠をもたないのに人を捉えて、しばしば悲劇に駆り立てる力をもっているからである。そのような不気味な力をもつものの一つとして、Jim に取り憑いた夢が凝視されているのだ。

Conrad の作品では、夢とか願望は大抵、人が自由に思い描いてその実現に向けて努力できるものとして描かれていない。逆にそれは、人に取り憑いてその人を束縛し操作するものとして捉えられている。従って、それが魅力的であればあるほど、それは厳しい凝視の対象とならざるをえないのである。強い魅力をもつ夢の中でも特に手ごわいのは、恐らく、Jim に取り憑いた名誉をあこがれる夢であろう。それは、個人的な愛や利益を越えて国家や社会に忠誠を尽したいという気高い気持が生み出す幻想であり、その気持が強まると人は、愛する恋人や家族さえ見捨てても世のため人のために尽そうとするのだ。その高貴な美しさにひかれてわが身を犠牲にした人は昔から無数に存在しており、正にそれ故にこそ名誉への夢は、Conrad の厳しい批判的凝視の対象にならざるをえなかったのである。

この気高く美しい夢の典型的な犠牲者として Jim は、作中で何回も言われているように、“one of us”<sup>4</sup>としての存在意義をもつ。(Ian Watt の言うように彼が“amazing”な若者だからではない。) 彼と同じような存在意義をもつ人物としては、*Heart of Darkness* の Kurtz が考えられる。Kurtz も、美しい夢の虜になり破滅していったという意味で、Jim と同じように“one of us”であると言えるのだ。が、Kurtz の場合、その破滅の仕方があまりにも空恐ろしかったため、彼を捉えた夢の理念的な美しさにもかわらず、彼は“one of us”とはほど遠い人物のようにしばしば思われてきた。また Jim も、その死に方にナルシスチックな自己栄光化が認められるため、往々過度に非難されてきたと言える。

恐らくこれは、Jim に対して厳しい態度をとる研究者たちが、夢を人間の自由意志によって見たり見なかったりできるものと錯覚しているためであろう。前に述べたように夢は、Conrad の作品では、私たちが自由に思い描いて操作できるものではなく、逆に知らないうちに私たちに取り憑いて私たちを操るものである。正にそれ故にこそ私たちは、夢に襲われた Jim の運命を他人事のように批判できないのである。彼を捉えた美しい夢は私たちすべてに取り憑く危険性をもっているが故に、彼の運命は私たちの大きな関心事にならざるをえないのだ。

しかるに、Albert J. Guerard や F. R. Karl のように、Jim の人間的な弱さを必要以上に強調する批評家は跡を絶たない。彼らはみな、Jim に取り憑いた夢など自分たちなら簡単に追い散らすことができるとでも考えているかのようだ。栄光の夢に囚われて自己中心的になっていることに気づかない Jim を非難

する彼らには、そのような夢から覚めている自分自身への自信があふれているようにみえる。

しかし、果たして私たちは、彼らのように夢に対して楽天的であってよいのだろうか。いつのまにか私たちの心の中に恐れこんできてそこを占領してしまう、暗い影をもった光り輝く夢の撃退方法を、本当に私たちは心得ているのだろうか。私たちは、私たちを捉える夢や観念のこの上ない狡猾さやその圧倒するような力に対して、もっと謙虚になるべきだと思われる。この謙虚さをもつことによって初めて私たちは、恐ろしい夢から操り人形のように動かされることを一時的にせよやめることができるかもしれないのだから。

結局私たちは、暗い運命を辿る Jim の個人的な性格についてとやかく言う前に、彼を虜にした夢の正体をもっと的確に捕え直す必要があるはしないだろうか。Jim に憑く夢のありようを知らないで彼を“one of us”と認めることは、“the criminally weak self”<sup>5</sup>も私たちの潜在的自我の一つであるというように、否定的な受け入れ方になりやすいと思われる。Jim の痛ましい運命を真に越えて生きるためにそれをもっと私たちの身近に引き寄せるには、むしろ Jim の高貴な精神こそ暗い影をひきずった光り輝く夢の好餌になりやすかったという美しい夢の危険なからくりを、虚心に見つめていく必要があるだろう。

## II

Jim に取り憑いた英雄的な行為をあこがれる夢は、一体どれほど古い歴史をもっているのでしょうか。正確なことはわからないが、少なくともそれが、Jim が生れ育った牧師館の上の方に何世紀にもわたって立っている教会よりはるかに古いことだけは確かなようである。C.M.Bowra もその著 *Heroic Poetry* で述べている通り、勲の夢を写した英雄詩は、“a real need of the human spirit”<sup>5</sup> に答えるゆえに、気高い人間の精神と共に古いのかもしれない。

しかし Jim が勇ましい生き方をはっきり夢見るようになるのは、彼が *Iliad* や *Odyssey* のような古代の英雄詩に心酔したからではなく、その当時よく読まれていた “light literature” (p. 6) を愛読したからである。この点で彼は、騎士物語を読み耽って騎士道の夢に取り憑かれた Don Quixote とよく似ている。二人とも、それぞれの時代にはやっていた娯楽文学から彼らのそれ以後の生き方を決する影響を受けたのである。そしてまた、名譽をあこがれる二人の夢が

共にまことにたわいなく、一見幼稚ですらあるという点でも両者はよく似ている。例えば Jim の夢は次のように子供じみたものであった。

He saw himself saving people from sinking ships, cutting away masts in a hurricane, swimming through a surf with a line; or as a lonely castaway, barefooted and half naked, walking on uncovered reefs in search of shellfish to stave off starvation. He confronted savages on tropical shores, quelled mutinies on the high seas, and in a small boat upon the ocean kept up the hearts of despairing men—always an example of devotion to duty, and as unflinching as a hero in a book. (p. 6)<sup>7</sup>

恐ろしいのは、この幼い自己栄光化の夢に、Don Quixote の夢と全く同様、私たちすべてをその虜にしてしまいかねない魔力的な真実が含まれているということだ。自らの命の危険も顧みず窮地にある人を救おうとする行為の気高さに魅惑されるのは、Jim や Quixote のように、一見 simple な人たちばかりではないのである。

このように幾つかの点で Jim の夢は Don Quixote のそれに似かよっているが、誰もが容易に気づくように、二つには決定的に異なっている点がある。それは、Quixote の夢が彼を波のように自然な上昇と下降の動きへ向かわせたのに対し、Jim の夢は逆に、彼に上昇志向を抱かせたまま彼の動きを止めてしまう傾向があったということだ。共に平凡な生活の内に閉されながら、Quixote は日常の出来事に冒険を見い出して、上昇と下降の自然な動きに身を任せた。これに対し Jim は、変化のない生活の中で上昇の夢だけ抱いて安定しようとする性向をもっていたのだ。幾つかの共通点をもちながら対照的とも言えるこの二つの夢の存り方は、Jim が東南アジアの奥地の一地域 Patusan に河を逆上って入っていったときの風景描写に、次のように具象化されている。

At the first bend he lost sight of the sea with its labouring waves for ever rising, sinking, and vanishing to rise again—the very image of struggling mankind—and faced the immovable forests rooted deep in the soil, soaring towards the sunshine, everlasting in the shadowy might of their tradition, like life itself. (p.243)

動的な波のイメージも静的な森のイメージも、共に“mankind”かその“life”のようであると言われている。しかしJimの人生において支配的なのももちろん静的な状態である。濃い影を宿しながら常に光に向かおうとする、古い伝統に根ざした名誉という夢は、上昇すれば必然的に下降せざるをえないという意味で自然な波のような動きにDon Quixoteを解放したのに、Jimには、闇との直結を無視させるような、下降することのない上昇希求を抱かせた。この上昇希求は、JimがPatusanに潜入するころには微妙であるが恐ろしい変化をみせている。この変化は、もちろん、Jimの痛恨のPatna号体験によってもたらされた。Patna号体験はJimの心に一生消えることのない傷を残したが、この傷は、彼の上昇希求を厳しく苛酷な形に変化させたのである。次に、Jimを死にまで追いつめることになるこの変化を引き起こしたPatna号事件について、詳しく見てみたい。

まず、Patna号に乗りこむ前のJimを、少し見てみよう。Jimは、その船の一等航海士になるまで長い間名誉をあこがれながら、それを獲得する機会になかなかめぐまれなかった。ただ一度だけ訓練生時代に、強風と大波の中でおぼれかけている人を助ける機会があったが、それを一瞬の恐怖心のため逸して以来、彼は何一つ事件らしい事件の起らない平凡な毎日を送らなければならなかったのである。ところがJimはこの状態、すなわち勇ましい夢が実現されることのない白昼夢にとどまっている状態に徐々に満足するようになる。なぜなら、そのような日常の中でこそ、危険の真只中で輝く勇ましい夢はその絶対の安全を保証され、一度も下降しないでどこまでも上昇していくことができたからだ。

Jimが古びた巡礼船Patna号に一等航海士として乗り込んだのは、彼がこのように安定した生活の中で挫折を知らない夢の果てしない華麗さに耽溺するようになっていたときであった。Patna号という老朽船は、わずか七隻の救命ボートしか備えていないのに八百人も巡礼を乗せ、東南アジアの端からアラビアのとある港まで何千マイルにも及ぶ航海に出発するのであるが、Jimも巡礼たちも共に絶対的な夢に囚われて、その航海の危険性は全く問題にしなかった。また実際に船は、絶対神から“the assurance of everlasting security”(p.12)を与えられたかのように、波一つない鏡のような海を水平に進んで難なく目的地に到着するかにみえた。Jimは、その安全性において今までの日常生活の延長にすぎないこの航海が、相変らず彼を勇ましい夢に自由に耽らせてくれることに大いに満足する。満足のあまり、深夜の当直をしながら彼は、勤務中の二

等機関士が酒に酔って船長にからむのを優越感をもって大目に見さえたのだ。

しかし、想像を絶する恐ろしい事故が起きるのは、Jim がこのように自分の揺ぎない優越性を信じきっていた丁度そのときであった。事故は最初、気炎をあげて船橋の上で盛んに身振りをしていた二等機関士をいきなり真逆様に遂落させるほどの衝撃としてその発生を伝えてくるが、Jim や船長は少しよめただけで、あとは誰が目を覚すでもなく、ただ得体の知れない“A faint noise as of ...thunder infinitely remote” (p.26) に合わせて船体がかすかに震動しただけであった。

船はこのとき船底を正体不明の浮遊物にえぐられ一部浸水も始まっていたが、錆びた鉄板一枚の隔壁がかりうじて海水の急激な浸入を防いでいたのであった。一瞬の内に八百人を越える人が海中に没しかねないこの恐るべき事件は、実際に Jeddah 号という巡礼船で起きた事故に重大な変更が加えられて提示されたものである。実際には Jeddah 号は、吹きすさぶ強風の中でボイラーが壊れた上に徐々に浸水も始まったのだ<sup>8</sup>。Patna 号ではしかし、波一つない穏やかな海でいきなり沈没の危険にさらされるという形で事故がふりかかる。鏡のように平らな海を水平に動いていた船が、いきなり沈没という垂直の危険に直面するのだ。Conrad がここで強調したかったのは、結局、波の曲線的な動きに対する水平と垂直の直線的な動きであったと思われる。

というのも、Jim の人生で支配的な静的状態において時折目につく重要な動きは、水平と垂直の二つの直線的な動きだからだ。直線は、強力な夢に囚われた Jim の操り人形のような動きをあらわしていると思われる。垂直の線は Jim が Patna 号から飛び下りたときに、水平の線は彼が最後に Doramin の前に進み出て射殺されるときに、最も典型的にあらわれていると言えよう。いずれも Jim が強烈な断念の思いに囚われて起した行動であるが、後者には自分の命を犠牲にして名誉をとろうとする、自由意志のようにみえるだけに一層やりきれない囚われの意識が窺われるのに対し、前者は、もう何をしてでも駄目だという思いに取り憑かれた Jim が文字通り夢遊病者のように動いたものである。

たしかに、そのとき Patna 号のふりかかった事故は、あらゆる人の自制心を喪失させるに十分なほど恐ろしいものであった。たった七隻の救命ボートしか装備してない老朽船に言葉の通じないアジア人が八百人も乗り込んでいて、それが一瞬のうちに海中に没する危険にさらされているのだ。海水の圧力でふくらむ隔壁を見た Jim が、あっというまにすべてが水没する瞬間を想像して、もう何もできないという強迫観念に呪縛されたのも当然であろう。それでも彼は、

救命ボートの繫索を切り離して最悪の事態に備えようとするのであるが、丁度そのとき、船長や機関士たちが必死にボートを降そうとしている姿を目撃してしまう。自分たちだけ助かろうとするその醜い姿を見まいとして Jim は目を閉じるのだが、そうすると死ぬ運命にある巡礼たちの阿鼻叫喚がまぶたの裏に浮んでき、また目をあければ船長たちの醜悪な姿がとびこんでしまうのだ。Jim はなす術も知らず、悪い夢でも見ているかのようにただ茫然と立っているだけだった。

それでも彼は、三等機関士 George が心臓の発作で急に死ぬということさえなかったら、白人の船員の中でただ一人 Patna 号にふみとどまったかもしれない。降したボートに乗り込んだ船長たちが繰り返し“Jump, George...” (p.110) と叫ぶのを聞いてフラフラと舷側に寄った Jim は、スコールの近づく音を聞いてもうこれまでと思いこみ、思わず飛び下りてしまったのだった。

Jim は自分が船から飛び下りたことについて、“I had jumped .... It seems,” (p.111) と後で思い出している。これを Guerard は、“betraying dark powers” である “the unconscious” の仕業に対する “the conscious mind” の手遅れの発見と見ている。が、人間の意識や行動は、Guerard の考えるように無意識なものと意識的なものにはっきり分けられるのだろうか。Patna 号から飛び下りる直前の、強迫観念に耐えきれなくなった Jim は、果たして無意識であったと言いきれるだろうか。

むしろ Jim はこのとき、もう何をしても駄目だということだけを過剰なまでに意識していたと言えるかもしれない。この強迫観念に耐えきれなくさせたのが、“Jump!” という叫び声とスコールの近づく音だったのだ。ただ一つのことだけ強く意識しているとき、私たちはその他のことに対して無意識的になっていると言うことはできる。固定観念に囚われた人は操り人形のように動くのである。しかし、もしこの状態を Guerard のように無意識的であると言うなら、私たちはほとんど一日中無意識に近い状態で生きているのではあるまいか。結局私たちは、一つの観念に囚われて行動してはまた別の観念に囚われるというようにほとんどの場合生きているのではあるまいか。

この意味で Jim は、悪夢のような行動を思い出して “I had jumped .... It seems,” と言ったとき、Guerard の考えたように “the conscious mind” をちゃんと取り戻していたわけではなかった。彼はそのときすでに、急激な上昇を求める夢にまたも取り憑かれていたのだ。“It seems,” には、夢の中で行動したような彼の気持が素直にあらわれていると同時に、自らの意志で行ったと

は思えない行動をできれば否認したいという気持の萌芽、すなわち自己正当化の夢が窺われるのである。

この否認が不可能であり自分の行動が広く知られた事実であることを知れば知るほど、Jim はそれを相殺してくれる急激な上昇を希求せざるをえなくなる。飛び下りたことを“an everlasting deep hole”(p.111)への下降のように感じるJim には、もはや「永遠に続く」上昇へ向かうしかないのだ。たわいなく幼稚だった夢は、Patna 号事件を契機にして、下降を知らない上昇願望から下降が絶対に許されない上昇希求へと、微妙ではあるが恐ろしい変貌を見せるのである。Jim が“one of us”として一層忘れがたくなるのは、次の章で見るように、彼がこの恐ろしい夢によって破滅へ追いやられながらそれを疑うことを知らない純粋な犠牲者になるからだと言えよう。

### III

Patna 号事件の真相を究明する裁判が始まったとき、それを最後まで受け通したのはJim だけで、ほかの白人船員は全員回避した。そのときJim を捕えていたのは、“I may have jumped, but I don't run away.”(p.154)という立派な決意である。何としても彼は、自分を罠にかけたとしか思えないあの卑劣な船長たちと自分は違うんだということを、証明しなければならなかったのだ。

この思いに囚われて最後まで裁判を受け通したJim は、もう誰にも後指は指させないと意気込み、不名誉を挽回してくれる上昇運動に向かおうとする。しかし、そのような意気込みに挑戦するかのように事件のことを思い出させるものが繰り返し彼の前にあらわれ、そのたびに彼はうまくいっていた新しい職場を突然やめて立ち去っていくのだ。こうして彼は、事件のことがあまり知られてない東の方へ、つまり“the rising sun”(p. 5)の方へどンドン退却する。この退却について Marlov は、彼が“his ghost”(p.197)から逃避しようとしているのかそれに直面しようとしているのか分らないと言う。もう絶対に下降はできないと感じているJim には、否応無しに事件のことを思い出させて彼を底無し穴に引きずりこもうとするものが目の前にあらわれたとき、それから逃げるしか道がなかったのだが、それがまた、“the acute consciousness of lost honour”(p.ix)すなわち“his ghost”を呼びよせるための効果的な方法にもなったのである。

“the rising sun” に向って退却する Jim が見ていた夢は、例えば “Some day one’s bound to come upon some sort of chance to get it all back again, Must !” (p.179) というものであった。このような夢に取り憑かれた人が、“the great army of waifs and strays” に加わって “the boundless pit” に向かって行進するのだ、と Marlow は思う (p.179)。たしかに Jim を捕えていたのは、その非妥協的なあくなき上昇志向によって、逆に彼を奈落の底に突き落しかねない危険な夢であった。名誉を求めるこの夢は、共同体のために個人が犠牲になる度合が大きければ大きいほど美しく光り輝くという暗い構造をもっているのだ。

その夢の暗部が Marlow の前にはっきり露呈されるのは、ついに退却する所をなくして困り果てていた Jim に Marlow が Patusan 行きのお話をもちかけたときであった。Jim は大喜びでこの話に飛びつき、今度こそ自分が何者か見せてやると意気込む。そして、“Slam the door !” と叫んで “I’ve been waiting for that. I’ll show yet...I’ll...I’m ready for any confounded thing... I’ve been dreaming of it...Jove ! Get out of this. Jove ! This is luck at last.” (p.235) と言うのであるが、その Jim を Marlow は一瞬心の底から嫌悪する。“Why hurl defiance at the universe ? This was not a proper frame of mind to approach any undertaking.” (p.236) と彼は思わざるをえなかったのだ。知人・友人はおろか、父や兄弟たちすべてに背を向けて Jim が取り戻そうとしたものは、果してそれが要求する大きな犠牲に値するものなのか。取り戻そうとしている名誉は、結局、ドアを閉めて忘れようとした世界の賞讃を必要としているのではないのか。賞讃を必要としないながら、いや必要とすればするほどますますその世界との繋がりを断ち切ることが必要であるような気持ちにさせる、全く矛盾した性格をその夢はもっているのではないのか。

この矛盾した性格の恐ろしさが最終的に明らかになるのは、彼が Patusan に入って英雄となり、そのために英雄としての死を受け入れねばならなくなったときである。彼は、Patusan で略奪をほしいままにしていた Sheriff Ali 一味を一掃して村人から絶対の信頼を寄せられる英雄になるのだが、このすばらしい成功には Marlow が洞察したようにあの Patna 号事件が “a shadow in the light” (p.265) のように付きまとっていた。時間的、空間的に隔たっていても、心理的には、底無しの穴に飛びこんだ Jim と英雄に祭り上げられた Jim は、垂直の一本の線で直接につながっていたのだ。そしてこの垂直の線は、さらに彼の英雄としての死にまで直結しているのである。つまり、Patna 号事件によ

って不自然にこわばった Jim の上昇志向が彼を Patusan の英雄にしたばかりでなく、彼の悲惨な死の直接的な原因にもなったと言えるのだ。下降を許さないこわばった上昇志向は彼を Patusan の英雄として固定したが、それは同時に彼の破滅の因にもなったのである。村人たちが彼を神様のように崇め、彼の言葉を“anything and everything”(p.268)として受け取り始めたとき、実は、彼の恐ろしい破滅は準備されていたのであった。

彼の破滅の直接の原因となった Brown 一味の Patusan 侵入のとき、彼はたまたま数日間奥地に出向いていて、代りに防戦の指揮をとったのは、彼の親友で村の首長の一人息子 Dain Warris であった。Dain Warris は一味の侵入を防いだばかりか彼らを小さな丘に追いつめさせしたが、彼らを最終的に始末することは村の長老たちに反対される。なぜなら、彼は勇敢だけれども村人の一人であり、殺されることもありうるからだ。しかるに Jim は白人であり、“unfailing victory”(p.361)の「化身」にほかならず、長老たちはやがて村に帰る彼に問題の解決を任せることにする。この措置は、Jim の不在中に決定されたこととはいえ、絶対の上昇を求めてやまない彼が自ら招いた措置であると言えよう。

Jim にとって致命的であったのは、彼自身の絶対の上昇志向が因で対決させられる破目になった Brown という男が、絶対の上昇志向ではとても太刀打ちできない恐ろしい悪党であったということである。Brown は、普通の悪党とは少し異なっていて、高潔なものを見るとそれを滅茶苦茶に破壊せねば気のすまなくなる男だった。言わば彼は、Jim とは全く正反対の、絶対の下降を夢みていたわけであるが、このような悪党にとって下を見ようとしないうる Jim の裏をかくことは、赤子の手をねじるように簡単なことであった。彼が、白く輝く Jim の無防備な高潔さを攻撃目標に自らも男らしさを装って接近すればよかったのに対し、下降が許されない Jim にとって Brown の見せかけの男らしさは額面通りに受けとるべきものであって、決してその裏の意味を考えてはならなかったのである。

かくして Brown は、いとも簡単に Jim をだまし、静かに退却するふりをして村の野営地を急襲し、Dain Warris を始め多数の村人を虐殺したのだった。この悲惨な事件の知らせが Jim の許に届くのは、彼が自分の屋敷で睡眠をとっていたときである。Patna 号事件の場合と全く同じように、静の状態にあった Jim の足許で底無しの穴がいきなりぽっかり開くのだ。しかし Patna 号事件のときは決定的に異なり、Jim はこの穴へ自身は永遠に上昇するつもりで飛び

込んだのだった。

すなわち彼は、息子の Dain Warris を殺されて怒り狂う村の首長 Doramin の前に自ら進み出て、彼の銃弾を平然と受けて男らしく死ぬのである。それは、底無しの穴への下降のようにも思われるし、逆に、自分の過ちを自分の死によって償おうとする気高い精神の表明とも受けとれる。後者の見方を信じて Jim は死に直面するのだが、それが彼の考えていたように気高い死であればあるほど鮮明にならざるをえない暗い影に、私たちは注目しなければならないだろう。

気高い夢に必然的につきまとうこの暗い影を、Patusan に着いてまもない Jim に早くも感じとったのは、彼を深く愛するようになる混血の娘 Jewel である。愛する者の鋭い直感によって彼女は、Jim を二人の愛よりも強力な何か、彼女にとっては“the unknown” (p.309) としか思えない何かに奪い取られるのではないかと不安に思う。彼女は最初、Jim を深く愛しながら彼に自分から離れてくれるよう懇願したのだが、それは、二人の愛より強い力をもつと彼女が感じている“the unknown” から彼を奪い取られることによって悲嘆にくれたくなかったからだ。彼女の言葉に従えば、Jim から捨てられることによって“I didn't want to die weeping, ...Like my mother.” (p.312) だったからである。

Jewel の母親は、やはり相思相愛の白人の夫つまり Jewel の実の父を、何か分らないものによって奪われていた。夫から見捨てられた生のつらさ苦しさを母は、死ぬ直前まで文字通り全身で娘に伝えたのだ。一体何が、決して非情とは言えない、むしろ人格的に立派な白人の男性に、大切な妻子さえ見捨てさせるのだろうか。Jewel にはそれが白人の世界からやって来る何かだということしか分からない。が、一見あやふやなその捕え方は、いかに的確に、いつのまにか私たちに取り憑いて無慈悲な行為に走らせる光り輝く夢の不気味な力を暗示してくれていることであろう。彼女が Marlow に向かって、何かに憑かれたような白人すべてを非難して次のように言うとき、私たちは私たちすべてを捕えて危険な行動に向かわせる夢の底力を目の前につきつけられたような気さえるのである。

‘...You all remember something! You all go back to it. What is it? You tell me! What is this thing? Is it alive? —is it dead? I hate it. It is cruel. Has it got a face and a voice—this calamity? Will he see it—will he hear it? In his sleep perhaps when he cannot see

me—and then arise and go. Ah! I shall never forgive him. My mother had forgiven—but I, never! Will it be a sign—a call?’ (p.315)

すでに Jewel は、愛する者の鋭い直感によって、Jim を奪い去ろうとするものが “sign” や “call” として外に存在するだけでなく、それに答えるものとして彼の内にも存在しかねないことに気づいている。「眠りの中で」彼が見たり聞いたりするものとして、つまり夢として彼を内側から捕えるのではないかと思っている。まことに夢こそ、この世で最も大切な人さえ犠牲にさせかねない不可視の怪物にはかならない。それは、“the unknown”の世界からやってきて私たちの内面にそっと忍びこみ、いつのまにかそこに住みついて外にあるものと呼応し合い、私たちを破滅へ追いやろうとするのだ。

名誉という夢を主題にし、それが必然的に個人的な愛を犠牲にせざるをえないという問題を扱っている点で *Lord Jim* は、ある種の戦争文学に似ている。これについて Ian Watt は、17世紀の英国の詩人 Richard Lovelace の “To Lucasta, Going to Wars” から “I could not love thee (Dear) so much/Loved I not honour more,” という詩句を引用して、“The argument is a commonplace in the literature of honour;” と言っているが<sup>10</sup>、名誉をより愛すればこそ恋人への愛情も深まるという、名誉と個人的な愛の不吉な関係を、私たちは Watt のように “a commonplace” としてあっさり片付けてはなるまい。その関係には、名誉がそれを何よりも讃える個人を有無を言わず滅ぼしかねないゆえ、決して解決されることのない恐ろしい背理が認められるのだ。この背理を私たちは、Watt のように *Lord Jim* を悲劇と見ることによって、つまり名誉のために恋人を見捨てて死んだ Jim を “amazing” と見ることによって解消してはならないだろう。

確かに Watt の見る通り、Brown に対する Jim の寛大な処置には、Guerard の言う “egoism and pride”<sup>11</sup>よりむしろ “a strong social and ethical component”<sup>12</sup>が認められる。自己栄光化の暗い影をひきずりながらも Jim は、共同体に対する fidelity を最終的に表明するために死んだのだ。その意味で *Lord Jim* は、Watt の主張するように、悲劇として読める作品と言えよう。しかし、まさにそれゆえにこそ私たちは、Jim の死を Watt のように “amazing” と見て済ますわけにはゆかないのである。名誉のために死ぬ Jim は悲劇的であるがゆえに、また、共同体への fidelity を表明する Jim は間違いなく “one of us” であるがゆえに、まさにそれゆえにこそ彼が夢遊病者のように死地に赴く

のを私たちは Jewel と共に決して許してはならないのだ。この気持ちを誰よりも強く堅持していたのに Jewel は、美しく輝く夢に彼女の一番大切な Jim を拉致されてしまった。私たちを簡単に虜にしてしまう夢には、いくら警戒してもしすぎることはないのである。Lord Jim は、この夢の途方もない恐ろしさを何よりも印象的に、私たちに伝えてくれているのではあるまいか。

## 注

1. Ian Watt, *Conrad in the Nineteenth Century* (Berkeley and Los Angeles: Univ. of California Press, 1979), p.356.
2. Jim に対して厳しい見方をしている主な研究者とその著書を下に掲げてみる。  
Albert J. Guerard, *Conrad the Novelist* (Cambridge, Mass.: Harvard Univ. Press, 1958).  
F. R. Karl, *A Reader's Guide to Joseph Conrad* (New York: Noonday Press, 1960).  
Robert J. Andreach, *The Slain and Resurrected God* (New York: New York Univ. Press, 1970).  
Adam Gillon, *Joseph Conrad* (Boston: Twayne Publishers, 1982)
3. J. Hillis Miller, *Fiction and Repetition* (Cambridge, Mass.: Harvard Univ. Press, 1982), pp. 22-41.
4. Jim が “one of us” であるとは、Author's Note で Conrad 自身認めていることだが、小説の中でも語り手の Marlow が、そのことを繰り返し述べている。例えば、1946年の Dent 版のテキストの43頁、78頁、93頁などで強調している。
5. Guerard, p. 147.
6. C. M. Bowra, *Heroic Poetry* (London: Macmillan, 1964), p. 3.
7. Lord Jim から引用する文は、すべて1946年の Dent 版からのものであり、その頁数はすべて本文中に示す。
8. Norman Sherry, *Conrad's Eastern World* (London: Cambridge Univ. Press, 1966), p. 50.
9. Guerard, p. 145.
10. Watt, p. 355.
11. Guerard, p. 144.
12. Watt, p. 354.

(昭和61年4月28日受理)